

第31期社会教育委員の会議

第2回定例会

令和6年7月30日

【1】開催日時

令和6年7月30日（火）午後6時30分～午後8時36分

【2】開催場所

教育会館3階 研修室「ぎんが」

【3】出席委員

井上委員（議長）、堀井委員（副議長）、牧岡委員、峯岸委員、近藤委員、村内委員、
新海委員

【4】出席職員

教育委員会事務局

渡邊生涯学習課長、富永社会教育係長、御園生社会教育担当係長、
大坪社会教育係係員

【5】傍聴人

なし

【6】次第

1 第1回議事録の承認

2 議事

（1）第31期社会教育委員の会議の取り組みについて

3 その他

（1）次回日程について

午後 6 時35分開議

○議長 少し定刻を過ぎましたけれども、時間になりましたので、これから31期社会教育委員の会議の第2回定例会を行いたいと思います。

本日は豊田委員が都合により御欠席という連絡があるそうです。また、佐藤委員と吉田委員は今向かっているところではないかというような話がありましたが、議事日程に従って進めさせていただきます。

まず、第1回の会議の議事録の承認でございます。事務局より事前に送付されておりますので、委員の皆様には御確認いただいたと思います。訂正等がありましたら、この場で申し出ていただき、皆さんと確認していきたいと思います。いかがでしょうか。

特になければ、承認ということで、もし後で何か大きなことが見つかった場合には、誤字などがあった場合には事務局に一任ということでお願いしたいと思います。ありがとうございます。

この会議終了後、峯岸委員と牧岡委員に署名をしていただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

今回の議事録については、当初は佐藤委員と村内委員と議長のところにもメモが届いていますが、佐藤委員がまだですので、場合によっては変更させていただきます。事務局よりまた完成版等を配付されるということですので、よろしく願いいたします。

では、議事に移ります。資料2です。第1回の定例会の終了後、事務局から次回の議事について少し相談したいということでありまして、そのとき、幾つかお話ししたんですが、それをこれから事務局から説明していただこうと思います。おおむね資料2のように事務局で整理していただいたので、それに基づいてお願いいたします。

○事務局 今、連絡がありましたけれども、佐藤委員が欠席の連絡が入りましたので、ご報告いたします。

○議長 では、確認をお願いします。

○事務局 それでは、近藤委員にお願いできますでしょうか。今回の議事録の承認ということになりますので、次回、署名していただく形になります。

○委員 分かりました。

○事務局 よろしく願いいたします。

それでは、改めて、先ほども議長からお話がありましたけれども、今期、第31期の取組

についてご相談した結果を、ご提案させていただきますので、お手元の資料2-1、資料2-2を御覧いただきたいと思います。まず、今回は、各委員の皆さんからたくさんの意見をいただきました。大変ありがとうございました。そこで、第1回の定例会の主な発言を抜粋させていただいたのが2-1でございます。読み上げさせていただきます。

まずは、社会教育の観点から青少年教育に特化するのではなく、成人教育を取り上げることも大事ではないかというようなお話もありました。次に、問題意識としては、世代間の分断があると。地域の中の若者の位置づけやPTAの加入率の低下など、今後、これまでのよい活動が継承されていくのか心配だというような話もありました。特に若い人も成人も含めてですが、やりたいと思いつつも一歩踏み出せない人たちを埋もらすことがないように、どうつなげていくかというのが社会教育としても重要なのではないかとことです。それから、大事な議論としては、ミドルの危機、これはミドル世代ということなんですが、そういった層の人たちのミドルの危機、ある程度仕事ができるようになった後、会社だけで全てではないということが薄々分かってきたと。地域に帰ろうと思ったときに、地域に仲間がいない。そういう中でどうやって地域と関わりながら後半戦を生きていくのか、多くの人が少しずつ感じ始めているのではないかと。特に定年した後どうするのかというようなこと。それから、PTAの成り手不足やボランティアをする時間がないとか、共働き世帯が増えているので、地域と関わる機会がない若い保護者が多くなっているのではないかと。人生100年時代に退職後、地域に関わることは難しいので、長期ビジョンと考えると、地域に関わる土壌をつくるべきではないかという意見もありました。一方で、子どもがいないとその輪に入れないのが最大の弱点ではないかと。特に町内会や商店会などは一部の人が関わるグループになっており、そのグループも高齢化が進んでいる。それから、私どもの生涯学習課の事業の中でも特にミドル世代と言われる40代から50代の特に前半の世代を対象とした事業が少ない。全くないわけではありませんけれども、なかなかアプローチできていないという状況もあります。この世代をどうつなげていくかということも課題となっております。

それを具体的に、生涯学習課の成人教育という事業がありますが、どういった実施状況になっているのかということで御説明をさせていただきます。ここに幾つかピックアップさせておりましたが、当課では、講演と映画のつどい、ピースセミナー、陶芸教室など成人教育を行っています。ただ、いずれも高齢者層の参加が多数を占めている現状ということになっています。そのほか、区立に通う幼稚園、あるいはこども園も含めてですが、小中

学校のPTAを対象にした保護者の学びと仲間づくりを目的に家庭教育学級等々を実施してございます。詳しくは資料2-2を御覧いただきたいと思っております。少し時間の関係で全ての事業の詳細まで御説明する時間はありませんが、簡単にさせていただきます。

まず、人権週間記念事業として講演と映画のつどいというのがございます。人権週間の啓発活動として、全ての人人間らしく共に生きていく社会を目指し、身近な暮らしの中から人権の問題を考えていくことを目的に実施してございます。人権週間ということで12月に実施しております。昨年度の実績は御覧のとおりです。

そして、平和講座でございますが、世田谷区の平和都市宣言の趣旨を受けて、戦争のない平和な社会の実現に向け、区民の方々と幅広く平和の問題を考える講座を実施してございます。

次に、大学公開講座広報ということで、講座自体は大学側で行っていますが、その広報を担っております。区民が多様な学習機会を得られるよう、区内の大学と連携して大学公開講座を区のホームページ等々で紹介してございます。

次に、大学等連携の共催事業です。大学等ということで、区内の大学などとの共催により、公開講座など役割分担して実施しています。昨年度の実績では、筑波大学附属駒場中・高等学校と連携しながら実施をしてございます。

続きまして、裏面でございます。せたがやeカレッジでは、区内6大学と教育委員会が連携しまして、インターネットを通じて世田谷の豊かな知識財を発信しているeラーニングという事業がございます。多様な学習ニーズに応えるため、各大学、教育委員会で制作するコンテンツをウェブサイト上で公開しております。パソコン、スマートフォン、タブレットから無料で閲覧することができます。こちらは10ジャンル、講座数100以上で実施してございます。

それから、陶芸事業でございます。区民の文化・芸術活動の振興を目的に、初心者及び一般を対象とした講習会を実施してございます。中には親子コースということで、小学生の子どもと保護者の方が一緒に受けられる講習会もございます。

次に、家庭教育学級です。親と子のあり方や家庭のあり方、学校・地域との結びつきなど、家庭教育に関する諸問題を共に学習する場として、区立幼稚園・認定こども園、小・中学校のPTAを対象に実施してございます。

続きまして、次のページです。家庭教育動画配信ですが、先ほどの家庭教育学級は、自分たちで企画をして行っていただいておりますが、最近の保護者の方は忙しく、企画もな

なかなか難しいということで、教育委員会で動画配信のための動画を作成してございます。社会環境の変化や共働き世帯の増加に伴って、限られた時間での家庭教育に関する学習機会の増進のため、家庭教育に関する動画を配信しています。令和5年度の実績として1本作成いたしました。現在では、全部で4本の動画を区のホームページで見られるようになっております。

最後に、家庭教育学級実績では、家庭の教育力の向上を目的に世田谷区より区立幼稚園・こども園、小中学校PTAに委託して取り組んでいただいた家庭教育学級の実績を毎年区のホームページに掲載してございます。令和5年度はこれからの掲載になりますので、令和4年度の実績を載せてございます。平成28年度から載せておりますが、全て載せてしまうと膨大な量になりますので、例として挙げさせていただきました。

それでは、また資料2-1に戻っていただきたいと思います。第1回の主な発言、これから私どもの生涯学習課の成人教育事業の実施状況を説明いたしました。これらを踏まえながら、今期のテーマの方向性でございますけれども、35歳から50代半ば、これを一般的にミドル世代と言われておりますが、そのミドル世代が地域との関わりがなかなかないという現状があり、区においてもこの世代になかなかアプローチできていない現状がございます。

先ほど説明をさせていただいたとおり、PTAとか、家庭教育学級ということで、全くアプローチできていないわけではないんですが、特にお子さんがいないミドル世代の層の方たちには、なかなかアプローチできていないという現状がございます。したがって、ミドル世代を今後、地域に主体的に関わり、つながる社会資源とすることを目的に、その特徴を抽出し、ミドル世代が求めていることは何か、また、どうアプローチし、どのようにつなげていくことができるのかなど、こちら辺は具体的には、今後、委員の皆さんに考えていただきたいんですが、今期のテーマとしては、このミドル世代を今後地域に主体的に関わる、つながる社会資源とすることを目的に、様々な意見交換をしていただけたらということで提案させていただきます。よろしく願いいたします。

○議長 今、提案がありましたけれども、何か御質問はいかがでしょうか。

少し補足説明いたしますと、通常、こういう会議体は、ほかの自治体でも引き受けているものがあるんですが、そういうところでは、教育委員会からその会議体に対して諮問されるんですね。これこれこういうことについて考えてくださいという諮問があります。何を考えてほしいか、その諮問に即して、1年間だと四、五回の会議を開いて、そこでの結

論を答申という形でまとめて教育委員会にお答えする。そしてその答申に基づいて施策に反映していくというスタイルが一般的ではないかなと思いました。ただ、前回30期はそうだったんですけれども、事務局をはじめ皆さんの御意見で、そういうスタイルもあるけれども、今回は、まず皆さんに社会教育、あるいは生涯学習と、成人教育と言ってもいいかもしれませんが、そういったものについて、何をどう感じていらっしゃるのかというのがまず聞きたいということで、前回、自由に発言していただいたということであります。ですから、諮問に基づいて答申をするというスタイルでは今回はやっていないということです。

ただ、前回、いろんな意見が出ましたので、それを全て包括的にというわけにはいきませんので、その中で改めてその結果を、議事録でありますけれども、生涯学習課で検討した結果、先ほど言いましたけれども、ミドル世代というところが気になっていると。ミドル世代とは何か、これは今日、後でお話が出てくると思いますが、35歳から50代半ばぐらいと言われ、考え方はいろいろでしょうけれども、仮にそうした場合に、行政のアプローチとしてなかなかそこにうまくできていないということがある。学校関係の皆さんは、例えば中学生の保護者、小学生の保護者、PTAはまさにPTAですから、それからおやじの会もお子さんがある世代の中にはもちろんミドルの年齢層に関わる方たちがいて、そういう方たちには接点があるけれども、子どものいない方もいらしているんですが、そういう人にはなかなか行政としてはアプローチができていないのではないかと。しかし、先ほどありましたように、今回高齢者の話はしませんけれども、そういう方たちもだんだん仕事からリタイアしたり、子どもが大きくなる。子どものいない方もいらっしゃるんですが、そういうふうな世代になっていくということを考えると、そうなるから何かをということではなくて、そのなる前、ミドルのときに何かすべきことがあるのではないかと、あるいはそこで何かできないかというようなことの問題意識をお持ちになったということがあります。

それで、今期の31期では、ミドル世代をキーワードにして、皆さんの御意見をいただきたいというようなことが先ほどの提案でした。その際に、私のほうからは、真つすぐ、率直に言ったら、ミドル世代、35から50といったときに、この会議でミドル世代の代表と言える人がいるのかという話もしました。副議長はそうですか。

○副議長 そうですね。ちょうど真ん中というと。

○議長 あと事務局もそうかもしれませんが、ミドル世代というところちょっと、だけれども、

シニアでもないかなとか思っちゃいますが、還暦を超えている世代とかをいうことがあって、ミドルが分かっている人がどれだけいるかという話がありますよという話はいたしました。頭では考えても、自分のミドルのときを想像しても、世の中が変わってきていますから。

それからもう一つは、PTAの経験、役員の方とか、校長先生たちがいらして、先ほど申し上げたように学校を通じて、そういうミドルの方と関わっているけれども、逆にお子さんをお持ちでない層というのは、普通はあまり関わらないですね。PTAとか、学校と全く接点がないとは言いませんけれども、やはり今までの話では、学校とかお子さんを通じて大人の問題も考えるということが多かったんじゃないか。いいか悪いかというよりも、そういう形が現実的には多かった。委員からも前期におやじの会の話をいろいろ聞かせていただきましたけれども、そもそもおやじの会というのは、子どもが同じ学校に通っているというところで出会いがあってというようなことが最初にあったというふうに理解していますので、それを外してしまうと、なかなかアイデアが出るかということも話しました。ですから、全く子どものいないミドルということだけをターゲットにするのか、子どもがいるミドルも話の中には含めていいのかどちらでしょうねという話もいたしました。全く子どものいないミドルだけをターゲットにすると、話が弾まない場合もあるので、それは整理しつつも、お子さんのいるミドルの方たち、小中高校生の親御さんの世代や、おやじの会の話も入ってきていいんじゃないか、それを全く入れないということにしなくてもいいんじゃないかということは前もってお話はしてございます。

ということで、先ほど、資料にありますけれども、社会教育、成人教育全体ということであると、それはもう子どもも入るでしょうし、それから、高齢の方も入ってくるわけですが、今回は、事務局の提案としては35から50代半ばぐらいの世代ということで、ミドルを念頭に置いて、社会教育という観点から検討していただけないだろうかという提案であります。多少補足いたしました。そういう提案があったわけですが、まずその提案について御質問や御意見などがあれば、出していただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○委員 質問ですけれども、今まで生涯学習課の成人教育事業を実施されている中で、参加した区民の方たちが、体験をしたことで、その後、何か持続して交流をすとか、コミュニティーになるようなそういう取組みたいなのはされているんですか。

○事務局 毎回毎回そういうことは念頭に置きながらも、ただ、なかなか現状としては難

しいところがあります。もっと具体的に言うと、個人の学びはしたいとして、例えば連続講座を3回なり、5回なりを受けていただきますが、集まった参加者同士でつながって何かやっ払いこうというところまではなかなかいかないのが現状です。ただ、お1人リーダーシップを取るような方がいて、この指とまれみたいな形で、何かやりませんかというふうになると、割と集まりやすいというか、やってもいいという人もいるんですが、まずそういう目立つような発言をするというような方たちがだんだん少なくなってきたというのは感じています。

○委員 例えば講座を受けた後に、振り返りとか、交流とかをテーブルに分かれてやるのか、ワークショップというんですか、そういうやり方もなさっているんですね。

○事務局 もうここ数年そういうやり方がなくなりつつある。全くないわけではなくて、むしろその3回なり、5回の講座の中でグループワークをしています。私も長くやっていますけれども、一番最後にフリートークとか、参加者同士でそうやってグループに分かれて全体で話す機会もつくっていたんですが、フリートークとプログラムに書くといらっしゃらない方がだんだん増えています。

○委員 その日はフリートークになるということなんですね。

○事務局 例えば最終回にフリートークで講師を呼ばずにというと、つまりあの先生の話は聞くけれども、みんなで何かをやるということは遠慮したいという方が増えてきているのではないかなというのは感じております。

○委員 そうなんですね。なかなか難しいですね。

私の娘が3人いて40代なんですね。私はこういう活動をやっているんで、娘も一緒にはやっていますけれども、地域とそういうふうに交流をしていくということについては、ちょっと私とは全然違う世代だなというのは感じるんで、そこを何とか、結局取り込むというよりも、親身になるということですよ。だけれども、そこはなかなか難しい世代なのかなというふうにちょっと思いますね。多分小・中学校のときはかなりしんどい。うちは3人とも公立なんですけれども、かなりしんどい中学校生活をやっていて、大人が信じられないみたいな体験をして、それで高校・大学へ上がって、大人になって、違ってはきているんだけど、そういうのはありましたね。

○議長 もう一つ補足というか、いつもとテーブルの並びが違うんですけれども、事務局の方たちも一緒に議論に参加していただいているんじゃないかと思って、今日はテーブルを変えましたが、皆様には御了承いただきたいです。先ほど申し上げたように、諮問があ

って、答申となると、最初のときに説明をして、あとはもう会議体にお任せということが今までのスタイルであったと思うんですけれども、でも、今回そうではありません。委員の皆さんの御意見を伺いながら、施策を考えていくことを行政として何を求めているのかということです。

ちょっと意地悪な考え方ですけども、もしかしたらミドル世代は役所なんかには期待していないんじゃないか。行政としては彼らにアプローチしたいけれども、今お話がありましたように、求めていなければ、いろんな企画をしても、民間もありますし、行かないよということもあるかもしれない。だとすれば、そうしたことを踏まえて期待されていないのかもしれないということなども含めて、現状としてどうなんだろうかということも考えてやっていったらどうでしょう、という話なんです。

○委員 こちらの資料2-1の今の発言というところで、よくあれだけの長い時間のものをまとめてくださったなど、本当にこのままだなと思いました。

今、議長がおっしゃったように、方向性については最後、意見交換を行うで終わっているんですが、基本的には先ほどおっしゃったように、諮問という形で施策に反映していくものかなというイメージはあったんですけども、この第31期は意見交換で終わってしまうだけなのかなというのがちょっと寂しい気がしました。その意見交換をした中で、今期にというわけではないけれども、将来的にいろんなジャストアイデアを持ち合いながら、入っていただけるということですので、それは区としてちょっと無理かなとか、そういうレベルも、そのぐらいのレベルに合わせていい話合いができたらいいなと思いました。

○議長 そのとおりです。先ほどは言葉が足らなかったかもしれませんが、今回はまだ意見交換ぐらいになると思いますけれども、2年間で、ずっと意見交換でとは思ってはいません。

○委員 ただ、逆に言うと、この2年で何かを諮問するというのが、このテーマではすごく難しいんだろうなというふうに思っていたので、非常に意義があるなと思いました。

○議長 事務局のみなさんとも少しお話ししたんですけども、皆さんから出た意見の中で、具体化できるものであればしていきたいというか、して行ってほしいなという話はあります。委員がおっしゃったように、そこまで行けたらいいなと思っております。

○委員 かといって、考えるのをやめるわけじゃなく、しっかりと考えていきたいと思えます。

○議長 難しいのは、例えばこの会議体に予算があって、その予算を使いながらというこ

とではないということなので、そういう現実的な難しさもあるんですよ。

○事務局 はい。

○議長 ということなので、お金があって、それを使って何かということではなくて、基本的には意見交換しながら、できるところは幾つか30期のときにも、ちょっとやってみるみたいなこともあったんですけども、できることとできないことがあるだろうという話ではあります。ただ、委員がおっしゃるように、意見交換から何か具体的な動き、ないしはこういうことだったら施策の中に取り入れてやっていけそうだというのであればやっていただきたい。これまでの会議でも2年間かけて提言して、答申のような形になっているんですが、そこで提言したことがその後、どうなっているんですかといったときに、必ずしも、政策に直結しているものばかりではないようなので、そういったこともお話しし、考えていらっしゃるということはありません。

○副議長 一番難しい世代ですよ。この世代って、社会的にどういう世代かというのと、いわゆる就職氷河期世代で、ちょうど40代半ばから50代初めなので、ある意味社会的に問題になっていた切り捨てられた世代で、多分教員が一番少ない世代ですよ。教員にもなれなかった世代。

○委員 私が今59ですけども、やっぱりすごく倍率が高かったですね。35倍でした。社会科の先生なんかも若干名しかいないから、多分200倍とかじゃないか。

○副議長 そうなんです。私も社会科の教員免許を取って教員になりたいなと思っていたんですが、もう地方なんてなれないですね、100倍、200倍当たり前で。今、だから、必死になって40代を、転職してでもいいから来てくださいみたいな形で獲得している世代ですし、公務員なんかもなれなかった世代ですよ。結局民間へ行って、やっぱり安定を求めて公務員だと転職して、公務員試験を受けたりとか、民間も、もうほとんど採用がない。求人倍率が、もう有効求人倍率はひどいとき0.7倍とかなので、先ほど議長が言われたように、あまりもう行政に期待せずに、自分たちで何とかしていかなくちゃいけないというすごい意識が強いと思うんですね。例えば民間に入ればちょうど中間管理職で、上からも下からも挟まれ、じゃ、夜、社会教育、仕事が終わった後余力があるかというのと、なかなかないという部分はやっぱりあると思うんですよ。なので、先ほど事務局からあったように、個人としてはいろいろやりたい。でも、いろいろ関わって、また挑戦しなくちゃいけないのというのは、もうやめたいという人のほうが多いのかもしれないですよ。

ただ、社会教育だと、やっぱり組織的に行う教育活動なので、2人以上でというところ

が一番難しいところですよ。だから、一人一人生涯学習をやっていると思うんですよ。ただ、社会教育という組織的に行う教育活動となると、やっぱりちょっと足を踏み入れられない人が多いのかもしれないですよ。そこが大きな課題、1人をどう2人以上にするかというところが一番大きな課題かなとは思いますが。

○議長 おやじの会の若い人たちはいかがですか。

○委員 この30～50代のおやじたちをどう動かすかというのは、おやじの会にとってはとっても大テーマで、この人たちをおやじの会のメンバーに入れたいというのが、各おやじの会の最大の悩みなんです。この人たちを動かすためには、僕の結論は、お祭りとスポーツなんです。一緒に酒を飲むと、あっという間に、環境が違うおやじたちが、今度こんなことをやろうよ、こんなイベントをやろうよと次々と、じゃ、それは俺がやるよ、別にやらなくてもいいのに、どんどんどんどんできていってというのをおやじの会で見えてきたんですよ。それを考えると、最初のハードルを越えさえすれば、やっぱり日本人の仲間意識ってすごいなと、個人主義じゃなくて。今、すごい個人主義というか、特に30代～50代の世代って共働き世帯が当たり前になってきて、時間が取れない。お父さん、お母さんがそれぞれ子どもを分担して何とかやりくりしているという中で、地域のコミュニティーだったり、おやじの会だったり、PTAもお金を払ってやってもらうみたいなカルチャーが出てきているじゃないですか。それを何とか負荷、それ以外の時間を割きたくないというこの世代が多いんですけども、でも、逆に、おやじの会の活動を見ていると、そこまでやらなくてもいいのにというおやじたちが出てきている現状を見ると、何が違うのかといったら、コミュニティーなんですよ。あいつあんなすごいことをやっているから、俺ももっと頑張ろうみたいな、お互いに切磋琢磨するみたいなのがどんどん出てくるんですよ。そう考えると、そこで個人個人のポテンシャルはすごく強いというか、すごいのに、それをつなげる仕組みさえあれば、全然捨てたものじゃないんじゃない日本人って思うんですよ。

そこでお祭りだったりとか、みんなで今度何かイベントをやって盛り上がりようよと、酒を飲んで、どうするというふうに仕組みができれば、酒を飲まなくてもいいんだけど、要するにぎっくばらんと、会議とかでもそうだけれども、参加することに意義があるじゃなくて、そこで俺たちは何ができるみたいな、そういうコミュニケーションができるような場ができれば、大分変わるんだろうなという気もする。それがすごくすばらしいのがスポーツで、全く関係ないおやじたちが、俺はフットサルをやりたいからと来たおやじたち

が、たった5分とか、7分とか一緒に試合ただけで、抱き合ったり、ハイタッチしたりとかしているわけですよ。実際、そういうのを見るわけですよ。その5分前までは全く知らないおやじたちだったのに、それが一緒に試合をやって、一緒に戦っただけでというのを見ると、ここのコミュニケーションというか、スポーツというのはすばらしいと、オリンピックも今やっていますけれども、スポーツというコミュニケーションの取り方ってすごいなというふうにも思い、僕にとってのカテゴリーとしては、最大の結論はお祭りとスポーツなんです。

もう一つ言いたいのが、30代~50代のおやじたちにとって、今現実にある子どもたちと家族をどう養うかというのが最大の悩みなんですけれども、でもその先、自分の老後はどうなるんだろうと。よく言われる2000万円は必要ですよとか、老後、孤独は大丈夫ですかとか、だから、地域のコミュニティーに取り組みたいという世田谷区のミッションだったり、おやじの会としての思いもあるんだけど、なかなかそれに入ってこられないんです、潜在的な思いはあっても。だから、僕が思っているオール世田谷おやじの会でやりたいなと思っているのは、お祭りとかスポーツを通して、年を取ったおやじたちが生き生きとして頑張っている。地域のボランティアでもそうだけれども、子どもたちを盛り上げるためのイベントだったりとか、いろんなよかれと思うような、お金にはならないけれども、これをやったらみんな喜ぶよね、みたいな。だから、基本におやじの会はみんなそれで盛り上がっているから、これをやったら絶対子どもたちは喜ぶに違いないとか、みんな盛り上がるに違いないという思いでやっているから、それを地域の活動だったり、自分たちのスポーツであってもいいんですけれども、生き生きとした老後のおやじたちを見せることが最大の30代~50代のお父さんたちを動かす活力になると僕は思っているんです。

そのために、ここから先は僕の妄想ですけども、地域ボランティアをやったりとか、地域の活動に参加して、無償だけれどもやったら、ポイントが与えられて、ポイントを持っている人は、優先的にあそこの行政が管理している老人ホームに入れますよとか、今やっていることが自分の将来の担保になるような、今やっていることは無駄じゃないんだみたいな、地域のためになっているんだ、みんなのためになっているんだみたいなものの実証を与えてあげれば、自分の将来のためにみんな一生懸命やるんじゃないかなと。

それともう一つ妄想ですけども、考えているのは、きっとみんなお金を使い切れないで死ぬんですよ、いつ死ぬか分からないし。でも、自分が死んだらそのときの残った遺産をその活動に寄附してくれと、寄附してもいいよみたいな誓約書をもらうとか、活動資金

として、会費を取るとかいろんな方法があると思うんですけども、あなたがいろいろ活動して、いろんなこういうことをいいと思って活動していたというのはよく分かっていて、でも、その活動をして、あなたがもし亡くなったときに遺産の10%をこの活動に寄附してくれとかいう仕組みはできないのかなというのは妄想として思います。

○副議長 面白いですね。

○議長 ありがとうございます。まずは皆さんのお話を一通りお伺いしたいと思います、委員いかがですか。

○委員 今日遅れてきて申し訳ございません。

○議長 今回のテーマはミドルということで、大体30代半ばぐらいから50代半ばぐらいミドル世代というふうにイメージするという話です。

○委員 さっき、祭りとスポーツがとおっしゃいましたけれども、私は小学校のPTAのバレーボールをずっとしてきておりまして、私が最初にPTAに関わった頃というのは、もう先輩がいて、先輩から誘われたら断れないくらいの勢いでバレー部に入ったんですけども、なかなか大人になってから、しかも子どもを産んで子育ての途中の人たちが体を自分で動かそうと思うと、やっぱり1人では難しく、そういったPTAの活動の中でバレーボールというスポーツが認められて、クラブ活動のような形でできたということは、うれしいことというふうに受け取っている人は多かったと思います。私は子どもが入学する前から近所の先輩に目をつけられて、あなた、あそこの小学校に入るんでしょう、早くいらっしゃいといって声をかけていただいて、子どもが小学校を卒業しても、引き続き、コーチとか監督という形でチームに関わらせていただいて、下の子が今年25になるんですけども、いまだに小学校のバレーボールに関わらせていただいています。審判の資格も取ったりしたので、バレーボール大会の運営に関わったりですとか、選手のお母さんたちの指導をしたりして、今も小学校のPTAのお母さんたちと関わらせていただいています。

本当に不思議で、初心者から始めて、全然なかなか芽の出ない、一生懸命頑張ってるんだけど、なかなか上達しないお母さんたちでも、最近は人数が足りなくて、お父さんにも声をかけて、うちのチームもパパさんが2人選手としているんですけども、一度バレーボールを始めると、みんなうそのように熱中して、練習を全然休まないんです。すごく熱心に活動されて、お子さんがいる間だけは現役選手として試合に出られますけれども、その後はOB、OGとして長くチームに関わってください。私のように、幾つになっても、会場は小学校なので、小学校に出入りさせていただいて、一番上だと80過ぎた

方まで関わっていらっしやいます。なので、本当にバレーボールって、無理をしなければ生涯スポーツとしていつまでもできるスポーツ、長く関わって、しかもバレー部として活動する中で、学校の行事に、体育館の施設を使わせていただいている団体として、子どもたちのためにこんなお祭りをやるからイベントに参加してください、お手伝いしてくださいという声かけだったり、学校で地域に関わる地区委員会にも積極的に出る人が多くなってきて、長く地域で活躍できる場にも関わっていけるといようなすばらしい活動をしていることをちょっとお伝えさせていただきます。

○委員 スポーツとお祭り、確かにそうだなとは思いますが、お祭りは確かに万人が参加できるイベント、スポーツは、スポーツを好まない人は何かとさっきから思っています。今みたいにバレーボールも、やってみればというのものもあるけれども、今、バレー部の部員も確保するのも厳しい状況になっているのは、バレーボールですらハードルが高いものになっちゃっているんじゃないかなというふうに思います。では、この世代の人たちが何をやっているかなとかと思うと、さっきの個人の学び、講座に行つて、何かを学んでいる人って、自分よりちょっと年下の人たちが多いですね。しかもアカデミックなもの、数学とか、物理とか、別に何の得にもならないかもしれないけれども、大学とかに受けに行ったり、その人たちのツアーでどこかに行ったりとかありますよね。そこから地域に戻ってきて何かをつなげるというのは、非常にやりにくい。だけれども、何か学びたいと思っていることには間違いはないですね。でも、この個人の学びをそのまま地域に下ろすというのは違う話なのかなと思ったりもしました。

それから、運動があまり得意じゃないなという人たちが、何をしているかというのと、この世代じゃないんだけど、それよりもっと上の世代の人たちでやっていることだったら、コーラスですね、御老人も含めて。世代広くやっているかもしれません。地元ですつとやっているような感じでやっています。ただし、その人たちもやっぱりそれが好きだからやっているだけであつて、地域のために何かとか、そういうものはあまりないかもしれない。あとはお話の会みたいなものをボランティア的にやっている方たちも、結構長くやっていますよね。上手な形でやっていますけれども、答えにならないんですけれども、コミュニケーションができる場というので考えると、やっぱりいろいろあるだろうけれども、今あるものだけで足りないんじゃないかなと、まだ考えが深まっています。

○議長 いろいろな御意見がありました。最終的には具体的なものにできたらいいなとは思いますが、すぐにそれをするというのは、難しいですから、いろんな意見を出し

ていただきながら、考えていけばいいかなと思っております。

全員にと思っていますので、事務局、いかがですか。

○事務局 個人的な意見になりますけれども、僕もスポーツをずっと子どもの頃からやっていて、確かに子どもを抜きにして社会とつながっているかという、限られた場でしかないかなと思っていて、1つは、趣味でゴルフをやっているんですけども、打ちっ放しの練習場に行って、そこで知り合った人たちと一緒にラウンドするだとかということはあったりするんですね。ただ、おっしゃるように、スポーツということは1つ大きなきっかけ、社会と関係を持つということのきっかけになるのかなと、聞いていて思いました。おっしゃるように、スポーツが得意でない人も中にはいると思いますので、そういったところは確かにどうアプローチして社会とつなげていくのか、つなげさせるのかということが分かれば、それを役所の施策に反映させることもできるのかなと私は聞いていて思いましたので、やはりそこら辺をどうアプローチしていくのかというところで、皆さんから何かヒントをいただけたらいいのかなと。私も意見交換はしていただきたいなと思っていて、何かこの場で施策的なものをまとめていただくところまではちょっと負担が大きいかなと思っています。なので、意見交換していただいて、出していただいた意見の中から、我々が実施している施策に反映できるような視点をいただきたいなと思っています。いただいて、その視点でもって成人教育だとか、青少年教育だとか、我々が実施している事業に反映できたらなと思って今日この場を迎えているというところですよ。

以上です。

○議長 社会教育委員の会議なんですけれども、先ほど言いましたように、せっかく教育委員会事務局の人も出席されているので、皆さん、よろしければ、今期は、教育委員会で社会教育を担当しているみなさんにも、ご意見をうかがいたいと思っております。

よろしくをお願いします。

先日も、事務局と打ち合わせをしたんですけども、30期のときに、おやじの会のみなさんからいろんなアイデアが出てきて、実際に行動をしていただいたということがあったんですね。その時にも、若いお父さんたちをどう仲間に引き込んでいくか、という話が上がったのですが、基本的には、子どもを介して、同じ学校の子どもたちのお父さんだというのがベースにあって、仲間の安心感みたいなのがあって始まっている。PTAなんかもそうかなと。バレーボールとか、コーラスのグループなんかにも結構それがあるんじゃないかなと思っておりました。

そうしたベースをないミドルと、どう接点を持つかというのは結構難しいだろうと。これからのお話はまったくの思いつきというか、自分の周囲のできごとなのですが、先日、職場の慰労会があって、二子玉川のあるバーに行ったんです。そうしたら、それがたまたまですが、月1回のライブの日だったということで、ブルースのライブをやっていたんですね。たまたま、入ったお店で、生演奏があることを知らずに行ったのですが、歌手の方が「これからライブをやります。月に1回のライブです。聞いていてもいいし、聞かなくてもいいですよ」と短い挨拶をして始まりました。なんとなく眺めていると、そこに集まっている人たちはミドル世代の一人で来店している人も多く、お互いに知り合いとは限らないみたいでしたが、なんとなく、仲良くなって、月に1回ライブを楽しんでいる様子でした。お互いに名前も知らないかもしれないけれど、好きなことでそのときとこのときをうまく繋がるような、ミドル世代の関係性の持ち方をチラッと見た気がしました。

私の身の回りにあった、そういう例をあと3つ、お話させていただきます。

私の家の近くに野球場があるんです。この間、暫くぶりにプロ野球を見に行ったのですが、その時に気づいたことは、しょっちゅう球場に来る人たちのゆるいつながりのようなものがあるみたいなんです。私の前の席に座ったミドル世代のグループが座っていました。会社の同僚とか、そういう雰囲気はなかったのですが、どのような関係か分かりませんし、もしかしたら、たまたま球場で隣の席になっただけなのかもしれません。その一人は、ビール売りのお姉さんと常連さんみたいな会話をして、最前のチームを熱心に応援していましたが、最終回まで見ないで、また球場で会いましょう、というような感じでサッと帰ってしまいました。自分の好きなことを自由に楽しんでいるわけですから、なんの問題もないのですが、なんとなくですが、私たちの世代の野球の応援とは違う雰囲気を感じました。

2つめは、皆さん御存じですかね、船橋市にふなっしーというキャラクターがいて、彼を応援する人たちがいます。そのふなっしー推しの人たちは、ふなっしーを通じて接点を持っていて、私の知り合いに話を聞いたところ、お互いに名前くらいは知っているけれど、職業とか、詳しいプライベートまでは知らない。けれども、ふなっしーを通じて、全国に仲間がいて、ふなっしーが仙台に行ったら仙台でみんなに会ったりするそうです。ふなっしーの推しの方たちには、ミドル世代のシングルないしは御夫婦でお子さんのいない人たちが多らしく、ふなっしーを通じてなんらかのつながりを持っていて、ふなっしーに救われたと感じている人も多く、お互いにあまり深いところまでは関わらないし、でも、ふなっしーがいてもいなくても楽しい付き合いをしている、ということでした。

アイドルとか有名人とかではなく、ふなっしーというところと、全国いろいろなところで会ったりするのに、あまり深い付き合いはしていない、というところが面白いなという話です。

もう一つは、ある小学校の校長先生から、小学校のボランティアをしたいという女性から連絡が来たのですが、どうしたらいいでしょう、と相談されたという話です。普通は、ボランティアをしたい、と言ってこられるのは児童の保護者、お母さんが多いんです。でも、その方はお母さんではなく、お子さんのいない女性でした。選挙のときに投票所となっていた学校に行ったら、校内の掲示で「ボランティア募集」とあったから、やってみようかな、と思ったそうです。ボランティアには誰でもなれるはずでして、学校に関わる人はその学校の在校生の親だけではない。学校というのは広く地域の中の学校だと思っているけれども、でも、在校生の親でない人が関わりとなると、校長先生としてはやはり心配だったので、面接をしたけれども、いい人なので、やってもらうことにしました、ということでした。地域の中の「学校」ではありますが、はやり、子どもを起点とするつながりがベースになりやすいですが、親ではない大人、そうした意味ではあまり学校とは接点がなかった大人とのつながりもできるはずだし、これからはつくらなきゃいけないかなみたいなことを感じました。

今お話ししたことは、この1ヶ月くらいに私の視野の中に入ってきたミドル世代の人のたちについてなのですが、ストリートピアノとか、匿名の不特定多数がかかわるものや場所であっても、なんらかのつながりが生まれるのかなと。そういうやり方は、役所のやり方とは違いますので、スタイルを考えていかないと、ミドル世代には届かないというか、何かテイストが違うんじゃないかなと思っています。

さきほど、質問したかったんですけども、おやじの会のメンバーは基本的には子どものいる方たちですよ。子どものいないミドル層と接点を持つことも、同じようにできそうなのですか。

○委員 お祭り、スポーツというふうには言ったのは、この2つのカテゴリーは入ってくる。だから、例えばスポーツって、僕はソフトボールをやっていますけれども、おやじのソフトボールつながりで、ソフトボールの練習をしたりとかするんですけども、うちのマンションの野球好きの方を連れてきたとか、子どもがいないんですよ。それはソフトボールとか、野球をやりたいからだったり、お祭りのおみこしを担ぎたいからうちのマンションの方を連れてきた。マンションつながりとかが多いんですけども、そういう友達を連れ

てきたみたいなの、子どもはいないんだけどもみたいなのというのが、このお祭り、スポーツって、世代関係なく、子どもがいるか関係なくつながるなというふうに思って、でも、今、おっしゃっていたように、バンドだったりとか、音楽だったり、講習だったりとかいうのも同じなんですよね。それが好きな人は関係なく入ってきて、一緒にやろうよという形になり得るんです。

先ほどふなっしーの話がありましたけれども、ふなっしーとか、いわゆる推し活ってあるじゃないですか、いろんなどうしてそこまで一生懸命になるんだみたいなの。僕の認識は、あれはアイドルだったり、ふなっしーって、最初はそこがきっかけだけであって、どうでもいいんですよ。一緒に盛り上がっている仲間、その仲間と一緒に盛り上がることに意味があって、最初のふなっしーだったり、アイドルって、ただのきっかけなんですよねと僕は思っているんですね、推し活って。そこでつながって、一緒に意識を共有できる仲間ができて、そこで盛り上がるから楽しいんであって、そのアイドルだったり、ふなっしーだったり、ターゲットにしていたものって、実はどうでもよくないかみたいなのというケースはすごくあるんじゃないかなと僕は思っています。

もう一ついうと、お祭り、スポーツ、講習、あと音楽、それは学校じゃないですかと思うんです。おやじたちは、大学とかがそういうのをやればいいのにと思うんですけれども、でも、いろんな科目を好きに取って、僕はこのカテゴリーに参加します、これには参加しますみたいなの、学校みたいなの仕組みをつくって、そのボランティアに僕は参加しますとか、そうしたら、君は単位5ポイントねとかいうような学校みたいなの、おやじとか、老後の年寄りの学校、大学みたいなのをつくって、でも、大学はありますよね。

○事務局 あります。市民大学とか、生涯大学とかというのがあります。

○委員 ありますよね。ああいうのをもっとカテゴリーを広げて、いろんな人が入れるような学校をつくれればいいんじゃないかというのは思いますけれども。

○委員 私はこども劇場せたがやという団体が母体なんですけれども、ライブのことを言おうかなと思ったら、おっしゃったので、ライブを見る、舞台を見るということでは、運動ができなくても、表現ができなくても、見るということでは共有ができるというのはありますね。あと、私は去年12月に住んでいるマンションの理事長に、なったんです。それで、うちのマンションでコロナの問題があって、マンションにいる子どもたちのことはちょっと心配というのがあったので、まず理事になって、子どものイベントをちょっとずつやり始めたんですよ。今回、理事長になってから気がついたのは、子どもの活動をやると、子

どもの親は出てくるんだけど、子どもがいない方はみんな自分とは関係ないなと思って、イベントに出られないんです。それで、ちょっとどうしようと思って、話し合っ、防災のことをテーマにしたんですね。今のところ防災のテーマで集まっているのは、それこそミドル世代です。お子さんがいる世代が何人もいろいろ集まっているんだけど、イベント自体はお子さんがいらっしやらない方が興味を持って出てこられています。そういうところで意識も変わってくるし、そこの関わる人も増えていくみたいなことを今のところ狙ってやっているみたいな感じですかね。

○議長 マンションの防災訓練なども、ある時期から変わってきましたよね。消火器の使い方の訓練とかじゃなくて、住民同士が知り合うことがまず必要だという観点で、子どものいる世代が喜ぶようなものとか、あとパーティーみたいな食べもの屋をやったりとか。私の住んでいるところでは鷹匠のイベントがありました。マンションですから、カラスや鳩の害があるわけですよ。それで、若い女性の鷹匠でしたけれど、腕から猛禽類を飛ばすんです。マンションの上層階あたりを飛んで、鷹匠の腕にまた帰ってきます。子どもは大喜びですが、食物連鎖の頂点にいる本物の鷹が飛び回りますので、効果は絶大で、鳩とかカラスがいなくなるわけですね。ああいうのを飛ばすだけで。

○委員 小学校、中学校は全部避難所になるじゃないですか。

○議長 海の近くなので、津波を想定して、校庭に集まるのではなくて、とにかく子どもたちは、学校の近くのマンションの階段を駆け上がって上層に行くという訓練をしています。

○委員 アイデアはこれからきっといろいろ皆さんにお願いしていく。一応でもこういう会なので、何かしらのエビデンスじゃないですけども、評価というんでしょうか、それを今ちょっと考えていたんですけども、例えば区民全員対象で、何かの社会教育的なものとかで、何かでつながっているものがあるかどうかという1つだけでも、アンケートで例年取っておいて、その変化を見たりとか、いろんな施策をやっていくうちに、そういうのが広がっていったのはどこなんだろうかという分析のためにも、つながっていますか、という人口割合みたいなのが指標としてやってみたら面白いかなと難しいかもしれないなと思いをなりました。

○議長 研究者としては非常に興味深いところですが、予算的には厳しいだろうという話があったので、この会議体ではできなくても、その後で何か考えてもらうこともできますね。

○副議長 確かに面白いですよ。

○議長 そういうデータが取れたら面白いけれども。

○副議長 確かに子ども、若者の意識調査をやり、高齢者の意識調査をやり、ミドルの部分は親としての意識調査をやるんですね。ミドル世代が主人公としての調査って確かに行われていないので、それは面白いかもしれないですよ。やっぱり社会教育なので、今、いろいろお話を伺っていると、ゴルフであったりとか、祭り、スポーツ、文化、いろんなライブとか、ジャズでもいいですけども、やっぱりその本人がこれが好きだからでつながっていかないと、多分つながっていけないですよ。なので、そこは一番大切にしないといけないのかなと。そういう意味では、やっぱり本当の意味でのオンデマンド、あなた次第ですよというところをちゃんと分かっていないと、それが行政の人たちがマッチングしていくかどうかですよ。例えば文化でいうと、確かにコーラスにしても、あと私の周りだと、結構ジャズバーとかに行くと、ジャズも楽器をやっている人なんですよ。その人なんか、俺はベースをやっているけれども、サクスの人がいない、トランペットの人がいないとか、そうすると、やっぱり探しているんですよ。その人たちはそれぞれのジャズバーとかに行って、こういう人がいないかと探して、つながったりするんですよ。

スポーツも多分そうだと思うんですよ。フットサルをやりたいけれども、メンバーがない。そうなったときに、それぞれ文化にしても個人としてやりたい人はいろいろネットで探したりしてやる。スポーツもそうなんですよ。だから、今、コミュニティーって非常に、コミュニティー観っているいろいろだと思うんですよ。推し活もそうだと思うんですけども、推し活も多分インターネットで知り合って、つながって、コミュニティーを形成するという感じなので、地縁的なつながりとしてのコミュニティーでは多分ないので、でも、今回要求されているのは、やっぱり世田谷区社会教育委員の会議ですから、地縁的なつながり、地理的なつながりとしての地域のということですよ。なので、そういうアプリって世田谷区はあるんですか。社会教育で自分はこれをやりたいんだけど、どういうサークルがあるのかなとか、どういうところでつながれるのかなみたいなのを探せるようなアプリというのは。

○事務局 アプリはないですね。ただ、サークル案内情報という紙ベースのものはあるんです。ただ、なかなか若者とか、30代、40代の方というよりは、50代以上の方たちですね。例えば、言い方は悪いんですけども、老後に何かしたいということでどういうサークルがありますかとか、あるいは世田谷区に引っ越して何かやりたいんだけど、どういう

サークルがありますかというお問合せはあります。個人情報がありますので、閲覧のみという形で対応させていただいております。

○副議長 本当に見ていると、ほかの区に行ってやっているんですね。ネットで探して、活動場所は大体千代田区の何とか体育館ですとか、そこでもいろんな人がいるわけですよ。東京都内とか、埼玉県から来ているとか、職場がそこだからとか、だから、本当はその地域版があれば、世田谷のあそこに住んでいるのとか、そういうところにつながっていくわけじゃないですか。でも、それをやっていないと、もうどんどん広くなっちゃって、いろんなところに散らばっちゃうなという気が私はするんですけれども。

○議長 世田谷区の会議ですから、最終的には世田谷に住んでいる人たちが豊かな生活を、そしてまた主体的に活動できるようになっていただきたいですね。

○委員 文化会館みたいなのがいろんな地域にあるとか、そういう文化の講座があったりとか、サークルがあったりとかみたいなのがいろんな、せめて支所ごとにあったりとかすると、そこに調べに行ったりすると思うのですが。

○副議長 そうです。その情報をどう得るかで、多分40代なんかだとインターネットがちょうどぎりぎり大学生ぐらいで広まって、アプリとか割と若者より駆使する世代だと思うんですよ。なので、それを紙ベースで探さないといけないとなると、まず探さないですよ。だったら、もう勝手に調べて、一番近いところで杉並があるんだとか、川崎でやっているんだとか、そういう形で、やっぱり地元ではないコミュニティーで生きていきますというふうに多分なっちゃうと思うんですよ。

○議長 具体的にはまた出てくるでしょうけれども、多分今のお話は、世田谷区内で探そうとはそもそもしていないというか、同じ仲間がいたら、別に隣の区でも、千代田区だってどこだっていいじゃないというような……。

○副議長 というふうになっちゃうでしょう。

○委員 でも、区内で探せるシステムがあったらいいなという発想ですよ。

○副議長 そうですね。それがちゃんとアプリで、自分の興味ごとに、文化とか、音楽、スポーツというジャンルで、スポーツでも、フットサル、サッカー、野球、ソフトボールとか選べて、こういうサークルがあるんだというふうにいえば、結構多分参加する人もいないんじゃないかなと思うんですけれどもね。あと祭りというものもあってもいいと思うんです。

○事務局 先ほど言ったサークル案内情報は紙ベースなのは、個人情報が載っているんで

す。各種サークルの団体代表者の御連絡先、それをやっぱりデータベース化して区のホームページに載せようという意見もあったんですが、ただ、それは勧誘も含めて、あるいはいたずらも含めて、いろんな使われ方をされちゃうので、そうなっちゃうとなかなかまだできないというところが現状です。

○副議長 だから、行政の限界はやっぱりそこですよ。個人情報保護とか。

○事務局 今のところは、閲覧までとしてあります。必要なものは書いてくださいとお願いしています。

○委員 個人情報まではいかなくても、どんな人を集めたいかとか、こういうのをやりたければ、いないかというようなのを、個人情報を抜いたような、やりたいものとか、それだけで、例えば番号をつけて、AとかBとか何かつけておいて、この方に連絡を取りたいよというのを区のホームページ、区のそういうシステムに入ったら、区のほうは大変だけれども、その人の連絡先はどうでしょう、連絡をしようかというような調整をするような形にすれば、紙だけじゃなくてもできないかなと思うんですけども。

○事務局 サークル案内情報は、総合支所の地域振興課がやっているところなんです。5つの総合支所がありますので、そこで毎回毎回検討はされています。

○委員 総合支所同士だと本当に近いし、いいと思うんですよ。

○事務局 いずれは多分そういう電子化といいますか、そういう形になると思うんですが、話を聞くと、やっぱりいろんな自治体でそういうことをやっているかということ、なかなかそういうところも少ないみたいです。

○委員 そうですね。そういえば、この間、掲示板、うちの近くは桜なんですけれども、桜の町内の掲示板で、ゴルフをやりたい人を近くで探しているのが、やりませんかというのが町内の掲示板にあったんです。僕もゴルフをやるんですけども、面白いなと思いつつ、近くの人と仲よくなるというのにはあるので、町内会とかのそういうところの掲示板にそういうのを載せるのはできるんじゃないかと、それはそれで面白いかなと思います。

あとは町会に入る人が今少ないので、僕は町会をそんなに一生懸命やっているほうじゃないんですけども、一応入ったんですけども、やっぱり町会の活性化とか、マンションの人たちはなかなか入らなかったりするじゃないですか。そういうのがもっと推進できたらいいんじゃないかなと思います。そろそろ僕も町内会の会合に出てみようかなと思っているんですけども、妻もそろそろ出ようかと、さっきの老後の話じゃないですけど

も、老後のつながりがないので、僕らも子どもがいないので、老後のつながりをどういうふうにしていったらいいかなということいろいろ悩んでいます。町内会には旅行みたいなものがあるじゃないですか、回覧板で回ってくるんですけども、大体平日なんですよ。そうすると、やっぱり30代-50代は行けないんですよ。町内会のほうでも、やっぱり日曜とか、土曜にきちんとそういうのを設定してくれれば、行けるかもしれないとか思ったりもしました。

○議長 話が先走ってしまいますが、言葉が適切か分からないけれども、いわゆるマッチングアプリ的なものですよ。行政が考えるとたぶんダメでしょうけれど、こういうマッチングアプリをつくるのを誰がやってくれませんかと言ったら、できる人が集まってくるのではないですか。今すぐということじゃないんですけども。

○委員 できるんじゃないですかね。

○議長 これは多分行政的発想でいきますと、保守的なつまらないものになりかねない。そうじゃない何かを目指すなら、みんながアイデアを持ち寄ってということが可能性としてはありそうかなとは思うんですけどもね。

○副議長 ただ、行政がやるとなれば、やっぱり紹介されている団体というのは、それなりの信用性、信頼性というか、誰が代表で、そういう信頼性は高いですよ。自分で探す場合は自己責任ですけども、変な団体はそれなりにいませんよという安心感がありますよね。

○議長 でも、つくる人はボランティアなおやじの会的に、というふうなというイメージなんですね。

○事務局 委託かなんかに。

○副議長 なるほど、ボランティアなどを対象に。

○議長 というぐらいでいかないと、会社とかに頼めば、それはお金がかかる話になっちゃうので、別の発想でいけば、可能性としてはあるかもしれないと思いますけれどもね。

その他はいかがでしょうか。今日、結論を出すわけじゃありませんので。

○副議長 さっきのポイント制は面白いんですけども、そのポイントは、何も将来の老人ホームでなくて、地域の飲み屋さんで使えるっていいですよ。地元の飲み屋って結構つながる場ですよ。いろんな趣味とか、そこからももちろん町内会につながったりとかする場だと思うんですよ。さらに自分の学びとっていろんなスポーツでも、文化でも、なので、そういうところで使えるというポイントでいいですよ。

○委員 実はそれをやったことがあって、僕は町会の役員をやっているんですけども、世田谷通りの商店街がないんですよ。世田谷通りの大蔵だとか、あの辺が町会なんですけれども、あそこの近辺にあるお店を巻き込んで、クーポン券、500円券みたいなのを発行するので、それを持ってきてくれば、町会が500円を払いますよというような取組として、何か地域に貢献した人たちに町会から500円クーポンを渡すんですよ。その500円クーポンをその町会のお店にある程度の認知しているお店へ持っていってもらって500円割引になります。そのお店は町会に持ってきてもらったら、町会から500円出します。そういう取組をちょっとやろうとして、やってみただけけれども、いまいち認知度低いなみたいな。でも、そういうことですよ。

○議長 まだニーズや仕組みがうまく噛み合っていないなくても、可能性はあるかもしれないんじゃないですか。世田谷はそういうところがあるじゃないですか。住んでいる人々のなりわいというか、活動をうまく使っていけば、いろんな可能性がある場所だと思います。

○副議長 世田谷の強みだと思いますけれども。

○委員 もう一つおやじの会で言っている会議として響くのは、先ほどの話にも出ていた防災なんですよ。スポーツをやったりとか、お祭りをやったりとか、自分の好きなバンドでもいいですけども、そういう仲間たちと一緒に盛り上がることはオール世田谷おやじの会としてそういうスポーツ大会とかしていますけれども、これには大義があって、自分たちが楽しんでいるだけじゃなくて、こうやって地域に住んでいるおやじたちが顔見知りになることが最大の目的である。それが防災訓練になるという大義を訴えているんですね。でもこれは、子どもがいようがいまいがみんなに関係するから刺さるんですよ。そうやって地域の中の顔見知りになって、いざとなったときに協力して何かをするということ、スポーツが典型ですけども、一緒に協力して何かをするという訓練を俺たちはしているんだという、もうみんなすごい協力してくれる。これは1つのキーワードだと思いますけれども、万人に共通に刺さる。

○議長 私は、ある学校に関わったときに、自分の周りにはいないタイプのミドル世代というか、それは若いお父さんたちと知り合いました。個人商店のオーナーもいれば、会社勤めの方もいましたが、地元のいろんな行事を中心に1年間が流れていて、たとえば、予春の桜祭りのときに出店を開いて焼きそばを売って、その売り上を地域でのいろんな活動の資金にしていく、というように地元での生活を心から楽しんでいるようでした。ただ、話を聞くと、そういうグループが幾つもあったって、同じようなグループがそれぞれに楽しん

でいるみたいなのですが、グループ同士の接点はあるまい、という点は少し気になりました。

○委員 おやじの会も同じなんです。

○議長 オール世田谷おやじの会ですか。

○委員 オール世田谷おやじの会です。だから世田谷区がバックアップしているんですよ。

○議長 私が聞いた話に近いのですね。おやじの会では楽しくやっているけれども、それを横につないでいるようなものがないから、それをオール世田谷おやじの会がやっているということですね。

○委員 そうです。でも、その成果が出てきたのは本当この数年ですね。みんな同じことを考えて、同じような悩みを持っているから、これをみんなで情報共有して、俺たちこのイベントをこういうふうに行ったよとか、こういう悩みがあるんだけど、どうみたいな、それはこうすればいいよみたいな、お互いに教え合うみたいな仕組みができたのは、本当ここ数年なんですけれども、ばかみたいというか、おやじの会ってみんながおらが村みたいなのでやっているんですね。別に自分たちが好きでやっているから、やらされていないから、何かほかから文句を言われる筋合いはない、俺たちは仲間でみんなで盛り上げてやっているんだから、好きにやらせてくれみたいな感じなところが、ほぼそうなんですけれども、でも、こうやって情報共有すると、そんなことできるのとか、それは面白そうだからうちもやろうよみたいな話になって広がったりとか今していますけれども、ここ数年ですよ。

○議長 そういうことをヒントにして、行政の仕組みの中に、何か取り入れられないでしょうか。

○事務局 そうですね。ですから、あまり最初からハードルを上げてしまうと、今まで講座とか、いろんなセミナーで何かをしてもらいたいとか、地域のために活動してほしいとかいうことがやっぱり強いかもしれないんですけれども、今のミドル世代の人たちには、多分刺さらない、見向きもしない。先ほどの議長の事例からもそうですけれども、必ずしも世田谷区ではないかもしれないけれども、緩いつながりで人生を楽しんでいるというんですか、あるいは息抜きだったり、そこが居場所だったりというのはあるかもしれないんですけれども、ですから、2-1の資料にもあったように、どうやって地域と関わりながら後半戦を生きていくのかということも含めて、ミドルの人たちが会社を辞めた後ということではなくて、今のうちからそういう関わりを持てる、地域に関わる土壌をつくる

べきではないかという御発言もありましたけれども、そういうようなきっかけみたいなことが、しかも今までやっているような行政のやり方ではなくて、緩いつながりみたいな形で、もしかしたら、地域の活動にはならないかもしれないけれども、ただ、1つのきっかけとしては、そういうつながりというのはこれから求められてくるのかなと。つながりがあれば、先ほどの話じゃないですけども、顔見知りにもなったり、情報が入ってきたりするのです、そういうことで偶発的な何か発案が生まれたりとか、何かこういうことをやってみようよ。その延長が例えば地域の課題解決につながっていくということにもなるかもしれないので、最初から地域の課題のために何かやってということではなくて、もっと敷居の低いような形で何かできたらいいかなというのは思っています。

○議長 かつてのように、公害とか放射線量とか、社会問題になるようなことがあって、これは心配だと住民が学習会などを開いて、解決を目指して主体的に学んでいく、というようなことが少なくなっているでしょうから、行政が用意した講座に来てくれた人たちがまとまって、という方法論だけでは難しいと思うのですが、ミドルの一人として、事務局いかがですか。

○事務局 さっき野球少年に期待をしていないという発言もありましたけれども、例えばそこが残念なところだなと思うんですけども、確かに僕ら世代は、本当にスマホで調べれば何でも分かる時代であって、誰かとつながろうとか、あとは何かの関係でつながろうと思えば、幾らでもつながる関係にいると思うんですよ。そんな中でもやっぱり地縁的に世田谷区内で近隣の方とつながって、何かしていただくということが、教育だけにかかわらず、それが区政の中でも大きな意味を持つてくるのかなと思っています。

そういうところからもすると、防災だとかというところも1つあると思うんですけども、何かあったときに、顔の見える関係を築いておくことで、そのとき、そのときに直面した社会的な課題に対応できるような住民の力というのをつくっておけるのかなというところは思っていますね。答えが分かっているよという話だとは思いますが、なかなかそこら辺の解決策だとか、取っかかりが役所としては認識できていないのかなとっていて、どうしても結果というか、何かやるにしても、対区民への説明というところで、結果がないとなかなか動きづらいというのが行政の欠点でもあるのかなと思うんですけども、社会教育というのは、そういうところとはまた違った視点から動いているものだと思うので、ある意味、我々社会実験的なもので何かやっていくという方法もあるのかなと思っています。そのために予算が必要になるのであれば、そこら

辺は確保できるように、調整はしていきたいなどは思っていますし、さっきおっしゃっていたアンケートを取るだとか、そういったことも、なぜミドル世代が行政と関わろうとしないのか、社会と関わらないで個人の学びだけにとどめようとするのかとか、そこら辺の原因を究明という大げさですけども、そこら辺も突き詰めていくことが、何かの判断基準というか、きっかけになるのかなというところもあるのかなとは思ったりもします。ちょっと取り留めがないですけども。

○議長 ここにいらっしゃる人たちは行政に関わる経験をお持ちですが、普通の市民にとっては、役所というところは敷居が高いんじゃないですかね。本当に困ったことがあれば別でしょうけれど、気軽に行って話をする、という気分になれるでしょうか。役所に行っても時間がかかるだろうし、そもそも、どの窓口に行ったらいいのかさえわからない、ということもあるかもしれない。アンケートにしても、お子さんのいる方であれば、学校を通せばある程度、繋がることのできるかもしれませんが、お子さんのいないミドル世代に、どうやって回答してもらうかは難しいですね。ネットで回答をすることも、どれだけアクセスできるか、工夫しないと。

○委員 これは今までやっていたのもアンケートはあるんですか。このそれぞれの事業はアンケートは取っていらっしゃる。

○事務局 それぞれの事業でのアンケートは取っています。

○委員 その項目とかは、そういった項目を入れて……。

○事務局 そういうやり方もあると思いますね。

○委員 そうしたら、もうお金もそんなにね。

○事務局 ただ、来ている方は、まだそれなりの意識があったり、意欲があったりということですけども、問題は圧倒的にミドルの人たちがなかなか参加されないということが多いので、実はそういうところから本当は来ているといいのかもしれないです。

○議長 でも、アウトリーチしたいと思っても一番聞きたい人に届かないということですね。来てくれた人は、そもそも来てくれた人だから、アクセスのしようがあるんですけどもということでしょう。

○事務局 そうですね。

○委員 今、事務局の話にあったように、何かをやらなきゃならないというふうになると、中途半端なところで結論を出して、そしてHow思考というんですけども、やることに意義があって、何かをやると、結局それはあまり意味がなかったねという施策って結構多

かったりすると思うんです。学校でもそうですけれども、多分行政でもそうなのかなと思ったりもしますが、だから、今、事務局が言ったように、何でそうなのかなということをごんごん深掘りして行って、その原因のところを追求して、そこにアプローチしていかないと何事も変わらないと思うので、今回、諮問ではなくて、意見交換ということができるので、それを十分に進めていけたらいいなというふうに思いました。

○議長 例えば、どういうところを掘り下げていきたいですか。

○委員 先ほど言ったように、ただ見ている、例えば学校の話だととてもよく説明できるんですけども、ちょっと違う話で説明していただければなんですけれども、いいですか。

○議長 でも、学校のことについては、皆さんが関わっているのだから……。

○委員 例えば学力の低下と皆さん言うじゃないですか。では、学校の教員の研修をしようとか言うじゃないですか。研修するということは、自分たちの授業の計画をする時間が減るじゃないですか。でも、研修だといってやって、結論を出していくと、本当は先生たちが忙しいからなんだよというところにどんごん深掘りしていくわけですよ。そうすると、研修なんかではなくて、学校にいる時間を増やさなきゃいけないという結論になってくるはずなんですけれども、でも、何かをしなきゃいけないというと、教員の研修と、こうなってくるわけです。そういうような発想で物事を、施策を考えていったら、本当に解決する部分が解決しなくなると思うんです。そういうようなことが社会教育にもしあるのであれば、今の事務局が原因を深めよということというのはすごく意義があることだと僕は思うんです。何かHow思考で何かをやらなきゃならないとなっちゃうと、それをHow思考と僕は習ったんですけども、そうじゃなくて、もっとWhy、Why、Whyを追求して行って、その原因をやると。昔某企業がそういうことをやっていたと聞いたことがあるんですけども、そういうことをやっていかないと、形の見栄えがあるもので、本当にそこが役立つものとか、効果があるものには及びつかないもので、無駄な税金を使ってしまうようなことになっちゃうのかもと思うんです。それは避けるべきじゃないかなと思います。そういう意味です。

○議長 分かりました。難しいですよ。

○委員 私は、社会教育委員になって、どうせなら、何かこの時間を使って、毎回毎回どうなるか分かりませんということなら、意味が少くないと、私としても、出るのが出たくなるので、だから、施策に何か少しでも影響があるような案がここで出ればいいというふうに私は受け取っていいんですか。今、どうなるか分からないというような話もあつ

て、いろんな話を出していいんですけれども、だから、そうすると、私は具体物になっちゃうんですよ。例えばこの講演と映画のつどいは何をやっているかを見ると、私も行かないなどか思うじゃないですか。そうすると、これのテーマを決めたのは誰とか、講演会の内容を、それをミドルの人たちの興味があるものに絞っているのかとか、それが絞れたらもうちょっと違わないかとか、具体的なことがないと、私は意見も言えないんですけれども、それはどうなんですか。

○議長 私たち31期の会議に対する、教育委員会のオーダーは、委員の皆さんのから社会教育に関するテーマや問題点、そして、解決していくための方法なども挙げていただいて、結論まで出さなくてもいいけれど、会議での議論を聞いていた教育委員会事務局の方が施策に反映できるところについては、反映させていきたい、ということなんです。だから、1回目は社会教育ということについて、みなさんと意見交換をして、ミドル世代をターゲットにできないか、というところまで来て、ミドル世代についてのいろんな考え方やアイデアをそれぞれの立場から出していただいて、その中には、具体的なものもあって、そして今言われたように、こういうことをやっていますというデータが出たんですけれども、これだったら、私も行かないわという……。

○委員 娘も行かないと思います。

○議長 もう見た瞬間に、普通の人はその思うわけですね。そうすると、そのプログラムという話になってくれば、ミドル世代をターゲットにして、ミドル世代を呼ぶにはどうしたらいいのかという話になってくるわけですよ。ただそれは、今回、話の流れで出てもいいけれども、例えば、それについては次回、というふうに段取りをしながら、考えていくのがいいのではないかと、ということです。そうしたなかで、意見交換だけじゃなくて、突き詰めていくこともあるでしょうし、「答申」として出しても、生きないというのであれば、生きるようなかたちを考えることもできるでしょうし、そうしたものをこのメンバーで作るのは難しいということであれば、それはこちらで受け止めます、というように事務局は言っていらっしゃるわけですから。

もっと言ってしまうと、社会教育委員の会議で、ミドル世代をターゲットとして具体的なプロジェクトを考えるのであれば、そもそも委員構成から考え直さないといけないのではないかというような話も、私から前もって事務局には話をさせていただいております。委員のみなさまは、社会教育に関わりのあるそれぞれの分野で活動されてきた方たちが委員に選出されてきたわけでありますが、ミドル世代一般について詳しいとは限りません。

このメンバーで、ミドルの話でいいんですか、と事務局に言ってあります。ありますけれども、第1回目の話の中から、事務局で「ミドル世代」というテーマを抽出されて、今回は、それについて、委員の皆様から話をお聞かせいただきたい、ということで、ここまで来ていると、私は認識しています。

議長としては、そうしたことについても説明をしたり、皆さんが自由な発想からいろいろなお話をしていただけるように、ふなっしーの例を取り上げたりもしました。ふなっしーはあくまでも話の種としてあげたわけで、今後は、もう少し具体的な話になっていくのかなと思ってはいたんですが、それでよろしいですかね。

○委員 話の流れだと、受けがいいものを考えようみたいな話の流れになりそうな感じがして、ミドルに受けが、もうちょっと方針がこういうふうになら社会教育をしたいという方針があって、ミドルというなら分かるんですけども、そこが私なんかはどう何を意見を言ったらいかがが微妙に困っていますという感じです。

○議長 それは先ほどから申し上げているように、諮問があって、答申をするというスタイルではないから難しい。もやもやとしているのではないかと想像いたします。

○事務局 繰り返しのなってしまうんですけども、資料2-1を御覧いただきたいと思うんですが、勝手ながら下線を引かせていただいたところがあります。こういうところが割と重要なキーワードになってくるだろうというふうに思っています。なので、なぜミドルに接点を持つようになったかというところは、ここを見ていただければなんですけれども、やっぱり担い手不足と言われていることももう皆さん御承知のとおりだと思いますし、いろんな団体の中でも高齢化が進んでいると。そういうミドルの世代の人たちはなかなか入ることはできない。入っていたとしても、子どもを介している人たちで、子どもがいない方たちというのは、なおさら関わる機会がなかったりということもあります。それによって活動がマンネリ化している場合もあります。ですから、ふだん関わりのない層の人たちが入ることによって、新しい動きになる可能性もあるのではないかとということもあります。

それから、ミドル世代の方たちが入ることによって、また1人顔の見える関係性ができてくれば、これは子どもたちだけじゃなくて、地域全体での防災とか、防犯にもつながっていくんじゃないかなというふうに思っています。

特に30代後半から40代、50代半ばぐらいの方たちというと、何かしらの職業的なスキルをお持ちになっている方たちもいますので、そういう方たちのスキルをうまく活用するというのも1つできるのかな。例えば学校でいうと、ゲストティーチャーみたいな形で何

かやるという、子どもたちとの異世代とか、多世代交流につながっていきますし、その方たちも子どもがいない方だとすれば、なおさら学校のこととか、地域のこととかということも意識が変わってくるだろうということも考えられると思うんですね。なので、そういうことを少しずつやっていると、今までにはないようなつながりとか、関わりというのが広がっていくのではないかなと。どちらかという、今まではやっぱり子どもを介した人たちの層とか、それから高齢者の層だとかというのが多かったと思うんですけども、ミドルの人たちの層が、特にお子さんがいらっしゃらない方たちの層という集まりがなかなかない。あるんでしょうけれども、それはまた例えばふなっしーとか、コーラスだったり、バレーボールだったりといろんなものが多分あるんでしょうけれども、そこが我々は見えなかったり、それから、そういう人たちを行政的なものにかんなくつけていくか、つなげていくかということも、それぞれ皆さんの御経験されているところからいろいろアイデアをいただけたらいいなというようなことは思っております。

○議長 今のお話でお分かりになったと思いますが、教育委員会としての立場から話をされていますので、この世田谷というコミュニティーをどう豊かにするか、社会資源を豊かにするかみたいな話になります。それは当然ですよ。ただ、私が例に挙げた、ふなっしーやふなっしー推しのみなさんは、そんなこと考えていないんじゃないでしょうか。日々の生活を生きるのに、行政にどう貢献するかなんてことは頭においていない、という例で挙げたんです。もちろん、何か災害が起きたときは、1人じゃ生きていけないので、みんなで力を合わせることはするでしょうけれど、社会のためにというところに、あまりにも結びつけようとすると、違和感があります。

世田谷区での仕事が長いので、私は世田谷には知り合いが多いのですが、地元には残念ながらほとんど知り合いがいません。仕事をリタイアする年齢になって初めて、地元での生き方が気になってくるんだと思うんですよ。社会教育について、学生に話しても、あまりピンとこないみたいです。それは当たり前ですよ。教員を目指す学生たちは子どもたちのことには関心がありますが、社会教育には関心があまりないんですよ。社会経験が少ないので、仕方ありません。

事務局は、行政の立場として社会教育を企画するとすれば、ミドル世代をもっと取り込んでいって、よりよい世田谷をつくりたい。そのためにはどうすればいいか、ということですね。ただ、そうした行政の感覚で社会教育を考えていくとミドル世代の関心というか感覚とズレちゃいそうなので、そういう人たちにアクセスしたり、そういう人たちが何を

期待しているかを理解して、そのうえで、何かができるかを考えたいとおっしゃっているんじゃないかと理解しているんですけれども。

○委員 今の私の認識をお話しすると、最初にここへ来たときに、私も全く同じことを思いました。これは何なんだと、何をするんだ俺たちはと思ったんですけれども、今回、僕は2期目なんですけれども、2期目をお引き受けしたのはなぜかという、ここに来ていいる人たちが、子ども食堂をやっている方だったりとか、隣に座っている方は子どもぶんか村だったり、スポーツ団体だったりとか、子どもたちと地域のために自らやって、いろいろな人が関わり合って、いろいろなイベントをやったりとか、いろいろなスポーツイベントだったり、そういう教室をやったりとかしているんですけれども、意味が分からないと思って。よくそんな時間があるねとか、おやじの会もよく言われるんですよ。でも、それは同士に見えて、そういう人たちはやっぱり世田谷に結構いるんだなと思って、面白いなと思って2期目も引き受けたんですけれども、僕の結論は、そういう人たちがこういうことに対してどう思いますかと今おっしゃったように、これを見て、興味が湧かない、これは読んで、どうしていくのか分からない。それでいいんだと僕は思うんです。そういう人たちがこういうことをやろうとしてやっているんだけれども、これをどう思いますかといったときに、それはだって、これは来ないでしょうだったりとか、じゃ、どうすればいいですかというたたき合いの意見交換をしているんだと僕は思っているんですよ。

以上です。

○議長 もうちょっと言うと、そういう意見が聞きたいと行政が言っているわけで、そういう意見はどこかで伝えないと、行政には届かないという現実があるのかなと思っています。

○事務局 先ほどもお話ししたとおりに、地域のためにやってくださいとか、課題解決から入ろうとかというふうに大上段から行ってしまうと、多分ミドルの人たちには刺さらないだろうなど。今までのやり方ではない違うやり方ももっと考えていかないと、それはお役所的だからというところもあるかもしれませんが、それを何か覆すようなものがどういったものがあるのかということも含めてぜひ皆さんからいろんなアイデアをいただければ、何か面白いと言ったら変ですけれども、いい施策につながるようなものになっていけたらいいなと思っています。

○委員 でも、それなら全く妄想なんですけれども、区民センターが年代の違う人たちのそれぞれ居場所になればいいと私は思います。私は若者の居場所をやっている支援の人た

ちのネットワークを区の学習会とか、交流会とかをやっているんですけども、若者は区民センターに一切行かないからとか、もちろんミドルも行かないですよ。

○副議長 行かないですよ。行くわけじゃないんですか。だって、そんな囲われたところに行かないですよ、楽しくないですもの。

○委員 だから、楽しくすればいいんじゃないと。

○副議長 やっぱりそれなりの自由意思とか、ある程度の裁量というか、それがなければ行かないですよ。例えば行政だったら、5時で終わりですよと言われてたら行かないんですよ。子どもたちも多分行かないし、あれをやっちゃ駄目、これをやっちゃ駄目、それをやっちゃ駄目と言われてたら……。

○委員 烏山区民センターは御存じですか。

○副議長 烏山、知っています。

○委員 1階のフロアが座るところはあるんだけど、あんなような状態になって、あそこに例えば、妄想ですよ。ちょっとライブをやっていて、椅子があって、ちょっとお茶でも飲めたら、それは誰か行きますよね。

○副議長 誰かしらは。

○事務局 でも、そういう発想だと思うんです。そういうことが大事だと思っていますので。

○委員 そういう発想も1つあるし、要するに、目的としては、世田谷の区民が、ターゲットを30から50という形が一番薄い層なので、そこを何とか地域とつながっていることがうれしいなと思う人の数を増やすと、アンケートと言ったのはそういう意味だったんですけども、それが我々の目的なんじゃないかと思うんですね。一番難しいところに今回チャレンジしようと考えている議長さんをはじめ、役所の方は英断してくれたんだと思うんです、そこを本当にやろうと。だから、諮問という形ではなく、意見交換にまずは今期はというのは、すごく理にかなっているというか、さすがだなと思いました。そういうことだと思います。

○副議長 有意義ですよ。ただ、これは全国的にも大きな課題で、共通の課題だと思うので、非常に有意義だというふうに私も思います。

○委員 次回もまたいろんな案を出していただけたら。

○委員 分かりました。

○委員 いろいろ妄想をいっぱい考えてきて。

○委員 妄想でいいんですよ。僕もさっき妄想を言ったじゃないですか。

○議長 妄想でいいんじゃないでしょうか。議長という立場からは、時間も気にしなきゃいけないので、今回の会議はこれで閉じたいと思いますが、今、まとめてくださいますけれども、単にミドルの世代がどう社会につながっていくかを行政的に考えても、つまらないものになりがちですので、そうであれば、来て欲しい人たちは行かないですよ。だけれども、行けば楽しいかもしれないし、社会としても意味があるかもしれない。そのためのアイデアが、事務局を目の前に言うのもなんですが、あまりないと。あるのかもしれないけれども、そういう方向では、形になっていない。それで、委員の皆さんの話を聞きながら考えたいということです。ですから、先ほども皆さんが言われていたように、これまでとは違う講座が企画できたらいいのではないかと思います。そうしたことを提案してもいいんでしょうが、でも、それを仕事としてお任せします、とは事務局は言っていないわけですよ。そうなので、まだ居心地が悪いでしょうけれども、話をしながら、次はもう少し具体的にという感じで、だんだんできたらいいのかなと思います。社会教育委員の会議は、年に4回開催され、任期2年間ですよ。

○事務局 はい。

○議長 前回の30期では委員に、子ども食堂をされている方がいたり、今日来られていないですけども、子どもぶんか村の方がいたりしたので、新たにどんな活動を展開できそうか、一、二回試行をしてみましょうと、具体的な企画にもチャレンジしていただいたのですが、ただ残念ながら、新しいプロジェクトをするためのお金とかは予算計上されていないし、会議の開催も年に4回で2年間、という制約があるということです。

委員だけで意見交換して、事務局の人たちが後ろで聞いているだけだと、困ることになりそうでしたので、今回は、いろいろと注文をつけるのであれば、意見交換に加わってくださいねという話で、事務局のメンバーも会議の場に引っ張り出してきたということです。ただ、逆に言えば、私の提案を受けて、委員のみなさんの意見を聞いて、できることであれば施策に反映しようという意気込みを持って事務局が参加されています。ですから、それは、私たちとしては前向きに受け止めて、何か形にならないままでも、アイデアやこういう意見が出てきたら反映してほしいと思います。例えば、私だったら行かないよ、と言われるような講座をそのまま続けていくのはやっぱりまずいですよね。特定の人しか来ていないから、そういう講座になるんじゃないかと思うんですが。

○副議長 これはちなみに申込みの年代とかそういうのは分かるんですか。実際に講座に

参加された方は結構いますよね。

○事務局 年代は分かります。

○副議長 なるほど。特に興味がある人でこれですよ。

○事務局 はい。

○副議長 その中でどれぐらいの年代の人が、そのミドル世代が参加されているのかすごい興味深いところですよ。

○事務局 ちょっと時間が過ぎてしまったんですけども、そもそも月曜日から金曜日までに行っている事業について、なかなか来られるかといったところもありますので……。

ですから、例えば土日、あるいは夜間とかということも含めて考えていかなきゃいけないだろうとは思っております。

○議長 回によっては、もう本当に妄想でいいので、実現するかどうか分からないけれども、こんなのだったら来てくれるんじゃないか、と言うような講座や企画を皆さんの視点で出していただいて、具体的な議論をするのもよいかもかもしれません。もしかしたら、そういうのが1つ、2つでも反映されるかもしれませんし。

議事進行が上手にできませんで、すみません。時間ですので、今日はこれで閉じ、今日は「ミドル世代をターゲットに」というところまで進んだということにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

○事務局 次回の日程についてはまた調整させていただきますので、よろしくお願ひします。ありがとうございました。

午後 8 時36分閉会